[検証シリーズ]

「美しい分煙社会」の作り方

第9回 池田清彦（早稲田大学教授）「たばこはスケープゴート」

須田慎一郎（ジャーナリスト）

非喫煙者である池田氏の視点は厳い

たばこ問題では、なぜか喫煙者と嫌煙者、吸える店と吸えない店、「無害」説と「猛毒」説といった対立の先鋭化、二分法ばかりが目立つ。これまでにレポートしてきた政府や一部自治体のエキセントリックな「分煙強制」の動きも、まるで意図的に喫煙者を悪者扱いして社会から疎外しようとしているように見える。「たばこの煙は他人に迷惑と被害を与えるのだから当然だ」というのがバッシングする側の論理である。しかし、そのやり方の異常さは、たばこ以外の事例と比べてみればわかる。

酒も飲み過ぎれば健康を害するし、酔っ払いは近くの人に迷惑をかけることもよくある。酒臭い空気が不快だという人も多い。しかし、「禁酒条例」とか「飲酒席と非飲酒席」など聞いたこともない。

クルマの排ガスは近隣住民だけでなく、通学する子供や散歩する赤ん坊、老人にまで甚大な健康被害を与えている。だから「排ガス条例」は東京都などが導入しているが、その規制をクリアした排ガスも、やはりまだ多くの健康被害を生んでいるし、「排ガス禁止地区」などはどこにもない。

要は程度の問題なのである。社会の利便や個人の自由、愉しみと、それによる迷惑や社会的損失をどう折り合わせるか、そこを考えて知恵を出し合うのが民主社会の仕組みである。たばこについても、「強制」より「共生」の道を探るべきではないかと、本連載で繰り返し述べてきた。

財団法人たばこ総合研究センターの評議員としてこの問題に深く関わってきた池田清彦・早稲田大学国際教養学部教授は、自身は20代のヘビースモーカー時代を経て禁煙、現在は1本も吸わないが、昨今の「禁煙ファッショ」には反対の立場をとる。「多様性」を認めようとしなくなった日本社会の病巣は、氏の専門である多元的な価値観に基づく構造主義生物学の観点からも疑問が多いという。

どうすれば喫煙者、嫌煙者ともに納得できる「美しい分煙社会」を作れるか、じっくりと話を聞いた。

＊

——神奈川に続き兵庫などの自治体、さらに政府でも喫煙を規制する動きが強まっています。

池田　権力というものは、常に他人をコントロールしたいという欲望を持っています。たばこにしろ酒にしろ、たとえそれを人々が楽しんでいたとしても、健康に悪いとか、環境に悪いという「正義のレッテル」がつくと、どんどん規制しようとするものです。

たとえばアルコール。重大な事故を引き起こす飲酒運転は確かによくない。だから規制がどんどん厳しくなって、現在は血中アルコール濃度が0・3ﾐﾘｸﾞﾗﾑ／ﾐﾘﾘｯﾄﾙ以上は酒気帯び運転とされます。これは欧米主要国の2～3倍も厳しい。でも、考えてほしいのは、アルコールの影響には個人差があるということです。限度ギリギリの酒気帯び運転より、徹夜で運転する方が危険な人もたくさんいます。

オーストラリアなどでは、「あなたの体重ならこれだけ飲んでも構わない」といった基準が示されている。よほど科学的といえる。ところが日本の場合、何でもかんでも「飲んだら乗るな」だけです。

——まして、個人的に愉しむこと、その人たちを民間の飲食店などが自主判断で受け入れることまで規制するのは行き過ぎだ。

池田　酒でもたばこでも、他人に危険や被害を与えるのでなければ、自分の身体のことだし、自己責任なんだから放っておけばいいのに、この国は個人の選択をも奪おうとする。あなたの健康のためとか環境のためとか称して、どんどん些末なコントロールをしてくるわけです。

「規制好き」は役人の思うつぼ（小宮山洋子・厚労相）

「たばこと肺がん」の嘘

——規制を設ければ取り締まる人間が必要になり、そのために組織や予算が作られ、そこに利権が生じるという構図もある。

池田　その通り。しかも一番弱い立場の個人を規制すれば、役人はいとも簡単にコントロールできる。たばこでいえば厚生労働省の利権ですね。分煙を法制化することで、それをやる役人が必要になり、そのための予算が分捕れる。規制というのは、多かれ少なかれ、みんな利権ですよ。

ところがね、最近ものすごくおかしな話があった。原発事故を受けて、医療を除く人工的な放射線量の許容限度を、それまでの年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルトまで引き上げたでしょう。国がコントロールできているうちはさんざん規制を厳しくしておいて、手に負えなくなった途端にいきなり20倍も基準を引き上げる。それで「ただちに健康に影響はありません」といっているんだから、こんなムチャクチャな話はありません。

ムチャクチャついでにいえば、欧米では、大麻は酒やたばこより社会的な害が少ないという見解が一般的ですが、日本ではものすごく厳しく取り締まる。大麻より放射能の方がはるかに危険ですよ。

今回の原発事故によって、健康や環境に関する国の基準がものすごく恣意的に決められていることがよくわかった。

——そもそもたばこが有害かどうかという科学的検証も十分とはいえない、という指摘もある。生物学の専門家として忌憚ないご意見をうかがいたい。

池田　がんというのは遺伝子の異常から起こります。だから肺がんになりやすい人というのは遺伝子検査をすればわかる。具体的にいえば、がん関連遺伝子というのが何種もあって、すべて正常ならがんになりにくい。反対に、生まれつき異常な遺伝子が多く、極端な話、正常な遺伝子がひとつしかないと発がんにつながる。たばこはがんの原因のひとつにすぎません。

僕は、一番大きな原因になっているのは「モータリゼーション（自動車の大衆化）」だと思います。50年以上前にロンドンと北京の肺がんの発症率を比較したデータがあって、その差は100倍にも上っていました。当時、喫煙率はほぼ同じでしたが、ロンドンの方が圧倒的にモータリゼーションが発達していた。現代社会で肺がんを誘発する一番大きな原因がモータリゼーションであることは明らかです。これに対し、たばこを吸う人と吸わない人の肺がんの発症率は、せいぜい1・数倍といった程度ですから、ケタが違う。

ただ、今さらモータリゼーションを否定すれば文明は成り立たない。だから、たばこが「スケープゴート」にされているのではないかと思っています。

もっといえば、自動車は基幹産業だけど、たばこ会社は日本に1社しかなく、マスコミもモノをいいやすい。そういう意味では、一種の「弱い者いじめ」ですね。

（以下次号）

●取材協力／入江一（ジャーナリスト）